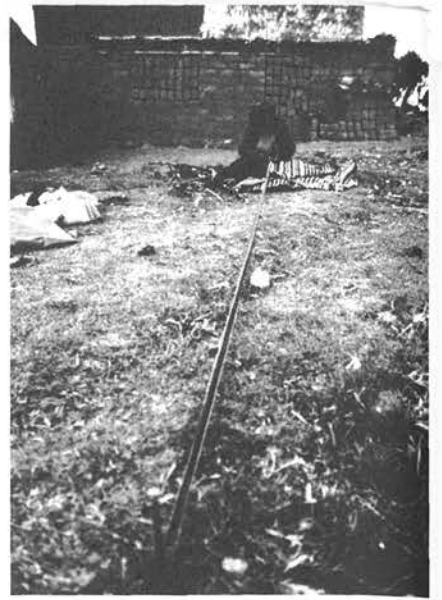


縦横無尽 タテとヨコ色とかたちのフィールドワーク(6) : 異形の織物2 : 丸紐状の織物

著者	吉本 忍
雑誌名	月刊染織
巻	275
ページ	73-75
発行年	2004-02-01
URL	http://hdl.handle.net/10502/5221



丸紐状の織物の機織り全景
(ペルー、チンチェーロ：1999年)



丸紐状の織物の機織り
(ペルー、チンチェーロ：1999年)



下糸を指先ですくい取って上糸と縋りあわせる
(ペルー、チンチェーロ：1999年)

縦横 無尽

タテとヨコの 色とかたち のフィールドワーク

吉本忍

異形の織物② 丸紐状の織物

四角形でもなければ輪状でもない異形の織物のうち、丸紐状の織物は南米大陸のアンデスに住むケチュア語系の言語集団のもとで織られている。わたしがはじめて南米を訪れたのは4年あまり前の1999年9月である。このときは翌年1月まで、ペルーの首都リマにある天野博物館 (Museo Amanó) の客員研究員として、天野博物館所蔵の染織関連資料の調査をおこなうとともに、ペルー、ポルビア、エクアドルなどでフィールドワークもおこなった。

縁を飾る異形の織物

天野博物館は初代館長の故天野芳太郎氏が発掘、収集された、プレ・インカ、およびインカの優れた染織品や土器を数多く収蔵し展示している世界的に有名な博物館である。リマに到着してしばらくのあいだは、天野博物館の収蔵庫で収蔵品の概要を把握するための資料調査に没頭した。そして、10月中旬からは、かつてインカ帝国の本拠地であったクスコに飛び、近郊のチンチェーロ村を皮切りにフィールドワークをはじめた。

そのフィールドワークの初日、クスコから車で約1時間、ゆるやかな起伏が連なるのど

かな田園風景のなかを走ったのちにケチュア人の村、チンチェーロに到着した。この村は伝統的な手工芸がさかんなところで、車が集落にさしかかると、さっそく道端の草むらのうえで女性たちが整経作業をしている光景を目の当たりにした。すぐさま車から降りてそのようすを見ると、その近くで一人の女性が杭を地面に打ちつけたのちに細幅織物の機織りをはじめた。そのときすぐには気がつかなかったが、織り手の手元をよく見てみると、織られているのは立体的な丸紐状の織物であるとわかって声を失った。わたしが丸紐状の織物を目にしたのはこのときが最初である。インドネシアのティモール島からはじまったわたしのフィールドワークの初日に、はじめて輪状織物の存在を知ったときと同様、南米ではじめてのフィールドワークの初日にも丸紐状という異形の織物と出会ったわけで、偶然とはいえ、わたしのフィールドワークはなぜか常識を外れた織物と縁がある。チンチェーロで織られていた丸紐状の織物は異形の織物であることから、機織りの作業工程も、一般的な機織りとは異なっている。そのもっとも主要な点は、先月号で紹介した管状織物のばあいと同様に、ヨコ糸がタテ糸

のあいだをラセン状に組織されていることである。ただし、チンチエロではじめて見た丸紐状の織物は、そのほかにも一般的な機織りとは異なる点があった。それは、針に通されたヨコ糸がタテ糸のあいだに織り込まれるたびに、そのヨコ糸が織り手の手元に置かれているリクヤ（風呂敷に類似の用途をもつ四角形の布）の端に縫い付けられていたことで、この丸紐状の織物は織り進むにしたがってリクヤの全長520センチの四辺を飾る縁飾りの紐となっていた。

連続する「目」

この機織り作業で使用されていた織機は、織り手が腰でタテ糸の張力を加減する腰機のうちに包括される。その構造はきわめて単純で、織機の構成部品には、タテ糸保持具として地面に打ち込まれた1本の細い杭と織り手の腰に結ばれた腰紐、緯入具として針、タテ糸整列具としてV字形の木の枝を利用した綾棒のほかには、タテ糸のあいだにヨコ糸を通したさいのタテ糸の配列を一時的に保持しておくための細長く薄い開口保持板があるのみで、この織機には綜統はそなわっていない。なお、すでに述べたように、この機織りでは丸紐状の織物のヨコ糸は、タテ糸のあいだをラセン状に一巡するたびにリクヤの端に縫い付けられていることから、織り手の腰紐には織りあがった丸紐状の織物ではなく、リクヤの一部が結び付けられていた。

一方、タテ糸とヨコ糸には、リクヤと同様にウールの糸糸が使われていた。タテ糸の本数は26本で、タテ糸整列具によって上糸と下糸に分離されたタテ糸は、それぞれ白色2本、赤色2本、青色2本、臙脂色2本、緑色2本、

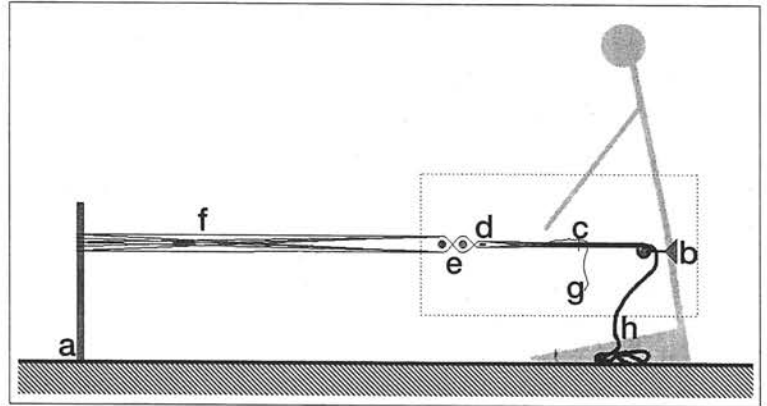


図1 側面図

黄色2本、ピンク色1本で構成されていた。また、丸紐状の織物の直径は約6ミリで、その織物の表面には、前記の7色の糸系によって、立涌状の曲線のあいだに菱形を配した幾何学的な連続模様があらわされている。ちなみに丸紐状の織物はケチュア語でニヤウイ・アワバと呼ばれている。ニヤウイは「目」、アワバは「縁」を意味しており、意識すれば「目の模様の縁」となり、菱形の模様が「目」をあらわしている。この立涌と菱形で構成された模様は摺織（縦り織）組織のタテ糸浮織技法によって織られているもので、摺織組織によって模様があらわされていることは羅と共通する。ただし、丸紐状の織物の模様はタテ糸密度の高いタテ糸浮織技法によ

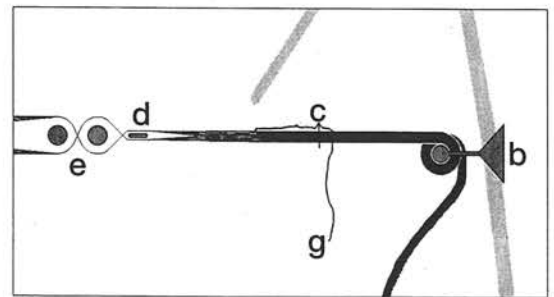


図2 側面部分図

丸紐状の織物を織る織機の構造

a-タテ糸保持具（杭）、b-タテ糸保持具（腰紐）、c-緯入具（針）、d-開口保持板、e-タテ糸整列板（綾棒）、f-タテ糸、g-ヨコ糸、h-丸紐状の織物

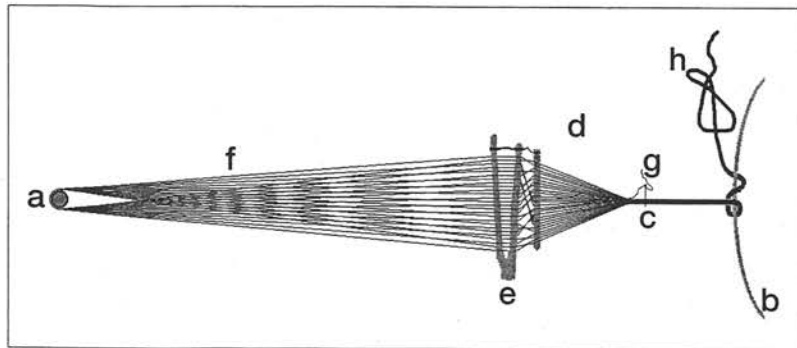


図3 平面図



リクヤの端に縫い付けられた丸紐状織物



丸紐状の織物

って織られていることから、織物の表面にはヨコ糸はまったくあらわれていない。また、織物の形状が丸紐状の立体形を呈していることについても、この織物が撚織組織であることから内部でタテ糸が複雑に交錯していることによっている。

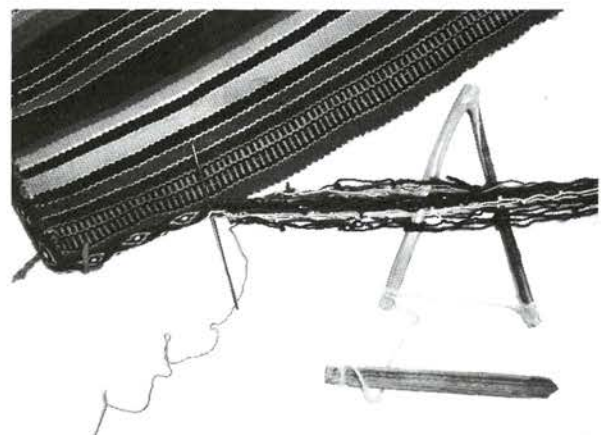
この丸紐状織物の機織りの作業工程では、タテ糸整列具によって上糸と下糸に分離されている同色のタテ糸がいずれも2本1組として機能している。したがって、タテ糸のあいだにヨコ糸を組織するさいには、まず、模様を織り出すために必要となる色糸の順に、2本1組のタテ糸のうちから下糸を右手の指先ですくい取って上糸と戻りあわせ、すべてのタテ糸の上糸と下糸をタテ廻りの開口状態にする。そして、その開口部とタテ糸整列具のあいだにできているタテ廻り状態の逆開口部に開口保持板を通したのちに、ヨコ糸を開口部に左から右に向けて通し、さらにリクヤの端に針を通してヨコ糸を縫い付ける。つづい

アンデス独特の丸紐状織物

て開口保持板によって保持されている逆開口部に左から右に向けてヨコ糸を通してから開口保持板を抜き取り、ふたたびリクヤの端に針を通してヨコ糸を縫い付ける。機織りの作業工程は、基本的には以上の作業の繰り返しとなる。なお、このような丸紐状の織物ではすべてのタテ糸が戻られた状態で組織されていることから、織物自体にもS撚り状のねじれが生じており、その結果として織り出された模様もS字ラセン状の連続模様となっている。

以上がチンチエロ村でわたしがはじめて見た丸紐状の織物の概略であるが、その後の調査では丸紐状の織物には、タテ糸の本数が20本、24本、30本のものもあり、紐の直径も3〜6ミリ程度とさまざまであることがあきらかになっている。ただし、それらの模様は、すべて一様に立涌と菱形で構成された連続模様となっている。また、丸紐状の織物の用途として紐の直径が6ミリ程度の比較的太いものも多くは、リクヤ、ポンチヨ、コカ袋などの縁飾りとしてもちいられているが、直径が3ミリ程度の比較的細いものは、髪飾りや帽子の飾り紐として使われている。図1〜図3に示した織機の構造は、そうした髪飾りや帽子の飾り紐を織るばあいのものであり、丸紐状の織物として織りあがった部分は、図に示したように直接織り手の腰紐に結ばれている。

今回紹介した丸紐状の織物は、現代ではこれまでにペルーやボリビアなどで織られていることがあきらかになっているのみで、アンデス以外の地域で織られているという例は知られていない。また、インカやブレ・インカの織物のうちには類似のものが見いだされる



織り途中の丸紐状織物

ことから、アンデスにおける丸紐状の織物を織る技術は、かなり古い時代にまでさかのぼることは確実である。なお、アンデスでは来月号以降に異形の織物として紹介する、杖状の織物、鬘状の織物、楕円状の織物のすべてが織られているが、先月号で紹介した管状の織物のみは、これまでのところ確認していない。ただし、管状の織物と丸紐状の織物は、ともにヨコ糸がタテ糸のあいだにラセン状に組織されていることから、アンデスにおいて管状の織物が織られていたとしても不思議ではなく、管状の織物ではないかと思われる実物資料の存在も確認している。しかし、これまでに織物組織の分析ができていないことから、残念ながら、それが管状織物であるか否かということをあきらかにするまでには至っていない。

(国立民族学博物館 民族文化研究部 教授)

よしもと・しのぶ